総合医学会報告

シンポジウム

臨床検査部門が目指すべきスキルミックスとは
-新たな医療連携を求めて-

塩澤勇治　田中信一郎*

第63回国立病院総合医学会
(平成21年10月23日　於仙台)

IRYO Vol. 64 No. 8 (523-524) 2010

要旨　「臨床検査部門が目指すべきスキルミックスとは　-新たな医療連携を求めて-」と題してシンポジウムを開催した.

「スキルミックス」とは，もともとは看護職における職種混合を意味していたが，最近では多職種のチーム内部に於ける職種混合のあり方や，職種間の権限移譲・職能の新設などを指すとされている．臨床検査部門がスキルミックスを実現するためには，自己の能力や役割をいかに他職種に理解してもらうかが重要であり，NHOでも積極的に取り組んでいる中，このシンポジウムはスキルミックスを真剣に考えるうえで良い機会となった.

今回はスキルミックスについて造詣の深い8名の方々が医師，看護師，臨床検査技師，薬剤師や医療行政側の，それぞれの立場から発表していただいた．いずれの演者も報告内容は理解しやすく且つ実践的であり，報告の一部を座長の要約とした.

多方面からの内容豊富な発表で，時間が不足し会場参加者を交えた意見交換は出来なかったが，多くの方々の聴講をいただき，スキルミックスの必要性や重要性，あるいは問題点などを改めて認識されたものと考えている.

キーワード　スキルミックス，多職種チーム医療，臨床検査技師

スキルミックスの概念

国立病院機構（NHO）の第二期中期計画がスタートした現在，「スキルミックス」という言葉を聞くことが多くなった．これは，「安心と希望の医療確保ビジョン具体化に関する検討会」(高久会長 2008. 9）において提言された概念であり，もともとは看護職における職種混合を意味していた．最近では医療崩壊が叫ばれている中でスキルミックスの概念が拡張されて，多職種のチーム内部における職種混合のあり方や，職種間の権限移譲・職能の新設などを指すとされている．NHOでも「さらなる医療の質向上のために，医療職種間の役割分担と協働に基づくチーム医療の推進を図る」という方針を掲げている.

臨床検査部門がスキルミックスを実現するには，

国立がんセンター中央病院　＊臨床検査部，国立病院機構中国四国ブロック事務所　医療課
別刷請求先：塩澤勇治　国立がんセンター中央病院　臨床検査部　〒104-0045　東京都中央区築地5-1-1
(平成22年3月19日受付，平成22年7月9日受理)

Skill-Mix and Policy Change for Clinical Laboratory Workforce：For the Collaborative Practice

Yuji Shiozawa and Shinichiro Tanaka*, National Cancer Center Hospital, ＊National Hospital Organization Chugoku-shikoku Office

Key Words: skill-mix, multi-disciplinary team approach, medical technologist

自己の能力や役割をいかに他職種に理解してもらうかが重要である．そのためには，自分たちは何ができて，何が欠如しているかを自覚する必要があろう．その上で，臨床検査部門が自己実現のためにアピールすれば受け入れられるだろう．自分たちの世界を理解してもらいたいなら「協働」の輪の中に踏み込まなければならないと思われる．

このような時代を背景に企画された今回のシンポジウムは時機を得ており，臨床検査部門においてのスキルミックスを真剣に考える上でよい機会となった．

発表内容の要約

今回は８人のシンポジストにご登壇いただき，それぞれの分野からスキルミックスについて発表していただいた．医師からは「臨床医が考えている臨床検査技師への期待や，輸血専門医の立場から求める臨床検査技師とは」と題して講演をいただいた．また，新人技師の教育・育成として，臨床検査技師養成施設から現状や将来展望の報告があった．さらに，国立病院機構側からの報告として「臨床検査技師に求める事項やスキルミックスへの取り組み・事例報告」などがあった．そのほか，臨床検査部門と看護・薬剤部門とにおける医療連携についても発表された．いずれの演者も報告内容は理解しやすくかつ実践的で興味深く拝聴した．詳しくはそれぞれの原稿をご覧いただくとして，ここでは簡単に要約をした．

前川真人氏（浜松医科大学医学部）は臨床検査医学の立場から，臨床検査技師の教育カリキュラムは多岐にわたり，医療に関する知識が幅広いことで，医師・看護師の業務を補完できる業種は臨床検査技師であるとした．その上で，２階建て構想として，広い範囲の知識・技術をベースに，自分の得意な専門分野を持つ方向に進むことが望ましく，そうすれば，いま話題の特定健診や治験の分野でも，技師の活躍の場が広がることを報告された．

中田浩一氏（産業医科大学）は輸血部医師の立場から，臨床検査技師に対する期待と可能性について言及された．最近では多くの施設で輸血検査業務の一元化が実施され，臨床検査技師の果たす役割と貢献が大きくなった．輸血検査は過誤が患者の健康被害に直結するため，きわめて慎重な姿勢と深い専門的知識・技術が要求されている．そのため，認定輸血技師制度（→539p を参照）を発足させ，認定技師が中心となって安全で適切な輸血検査が実施されるとともに，指導的役割も果たしている現状を解説した．また，「輸血のＩ＆Ａ（視察と認定）」についての現状と技師の役割や，造血幹細胞移植・再生医療への関わりについても言及し，専門的な技術と知識を持った臨床検査技師に大きな役割を期待しているとされた．

廣瀬英治氏（熊本保健科学大学）は，臨床検査技師養成施設の立場から考察し，現在は三種類の養成機関が混在しており，年間に5,000人程度の卒業生が生まれている現状を報告した上で，技師教育が高度化し，大学や大学院を設置する大学も増えていると述べた．その背景には，技師にもチーム医療に必要なコミュニケーション能力や経営的感覚，問題解決能力，危機管理能力などが要求される時代によるものとした．廣瀬氏は，もとＮＨＯの臨床検査技師としての経験から，勤務しながらの修士取得も可能であり，大学院はスキルアップの一方法であることを強調した．

国立病院機構側からは奥田勲氏（ＮＨＯ本部）と永井正樹氏（ＮＨＯ関東信越ブロック事務所）の報告があった．奥田氏は行政の立場からスキルミックスを解説し，その歴史的背景や経過に触れわかりやすく述べた．その中で，いま求められている臨床検査技師像は，医療人としての倫理観の醸成，幅広い知識と技術（医師からの信頼），専門性の獲得（認定資格），臨床現場への進出，他職種との連携などであるとした．そして臨床検査技師として何をやりたいか，何ができるのか，などの情報発信が大切だと述べた．そのためには人材育成とスキルアップが大切であるとして，機構本部も各種研修制度の充実を図りながら支援していると述べた．また，中国四国ブロックの人材確保・育成のプログラムを参考に，今後の進むべき方向性を示された．

永井氏は，従来の業務のほかに病棟検査技師や検査相談などの業務も検査科が取り組むべき領域であるとした．その上で，職域の拡大と専門性の獲得はバランスを取りながら進めることが重要であるとされた．関信ブロックで取り組んできたスキルアップ研修の現状と課題についても報告された．

以上のように，多方面からの内容豊富な発表だったので，時間が不足し会場参加者を交えた意見交換はできなかった．しかし，臨床検査技師のみならず他職種の多くの方々の聴講をいただき，「スキルミックス」の必要性や重要性，あるいは問題点などを改めて認識されたものと考えている．